文部科学省

令和７年度　文部科学省
現職日本語教師研修プログラム普及事業

児童生徒等に対する日本語教師【初任】研修報告

実施機関名	特定非営利活動法人　メタノイア
事業名	子どものための日本語教育研修（子ども初任研修）
事業実施期間	令和6年8月～令和7年2月
研修受講者数及び研修修了者数	研修受講者108名中、研修修了者99名

文部科学省

■ 事 業 概 要

１． 本事業の目的

地域における子どもを対象とする日本語教育・支援を行っている、あるいは、これから携わろうと考えている日本語教師・支援者等を対象に、文化審議会国語分科会による「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」（平成31年3月31日）（以下、養成・研修報告書とする）に示された、「児童生徒に対する日本語教師（初任）に求められる資質・能力」を育成するとともに、実践現場である地域支援の場における活躍の可能性を広げることを目指す。またこれまでの本事業の研修修了者のフォローアップと相互研鑽のためのネットワーク構築を図ることを目的とする。
具体的には、次の2つの目的にもとづき本事業を実施する。

①児童生徒等への日本語教師研修：全国および海外にまたがる地域支援あるいは学校内支援の現場で、「地域」「ポジション（立場）」「対象児童生徒年齢層」により異なるそれぞれの課題に対応できる外国人児童生徒等教育・支援人材を育成する。
②研修修了者のその後の取組みを共有し、課題解決に関する情報交流を行うために連携関係を作り持続可能なネットワークの仕組みを構築する。

文部科学省

■ 事 業 概 要

2． 取り組みの内容

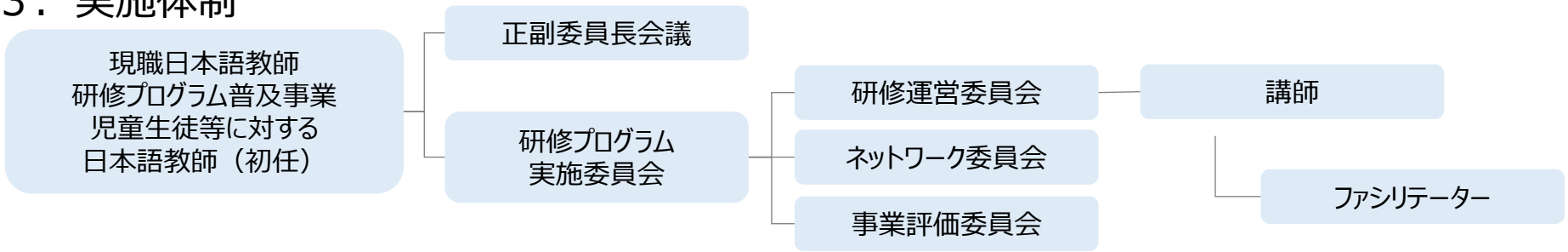
子ども初任研修	児童生徒等への日本語教師研修：全国および海外にまたがる地域支援あるいは学校内支援の現場で、「地域」「ポジション（立場）」「対象児童生徒年齢層」により異なるそれぞれの課題に対応できる外国人児童生徒等教育・支援人材を育成する。
修了者ネットワークの構築	研修修了者のその後の取組みを共有し、課題解決に関する情報交流を行うために連携関係を作り持続可能なネットワークの仕組みを構築する。

これらの取り組みを通じ、養成・研修報告書において指摘されている課題である、「就学前から高等学校・就職までを視野に入れた教育」「発達段階に応じた日本語教育の方法」「地域・学校・企業等間の連携による支援」を行うための資質・能力を有し、さらに、マイノリティである子どもたちのエスニシティやアイデンティティを尊重しながら教育・支援を行うことができる初任日本語教師を育成する。また、持続可能な相互研鑽の機会を提供し、地域における児童生徒等への日本語教育の充実に貢献する。

文部科学省

■ 事 業 概 要

3．実施体制



①正副委員長会議： 事業全体を統括する会議として正副委員長会議を開催する。正副委員長会議は、事業全体の計画、調　整にあたるとともに、研修受講者募集、選考に責任をもつ。

②研修プログラム実施委員会： 正副委員長及び研修講師３名から構成し、研修プログラム全般の統括を行う。下部組織にタスクフォースの委員会として、研修運営委員会、ネットワーク委員会、事業評価委員会を配置し、事業全体の一貫性を担保しつつ運営を行う。

③研修運営委員会： 研修講師全員とコーディネーターで構成し、スクーリングおよび実習実施日程や内容、その際の具体的な役割を協議して決定する。スクーリングおよび実習はすべてオンラインで実施する。研修運営委員会は、全体を3クラスに分けて研修を実施し、実施後は、研修プログラム実施委員会に実施報告を行う。

④ネットワーク委員会： 研修修了者のフォローアップとネットワーク作りの取組みとして、研修修了者のためのフォローアップセミナーの実施、修了者の相互研鑽のためのネットワーク構築に取り組む。

⑤事業評価委員会： 評価計画の立案、検討を行い、それに基づき評価を行い、研修プログラム実施委員会に報告する。

文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

１． 研修の目的と特徴

（１） 研修の目的・ねらい

外国人児童生徒等の背景や言語・学習環境、各地の受入れ・指導体制を理解して、キャリア支援や社会参加という視点をもって子どもたちの生活・学習に関連付けて日本語を教えられ、マイノリティである子どもたちのエスニシティやアイデンティティを考慮した教育・支援を行うことができる人材を育成する。研修を通じて、各地域の児童生徒に対する日本語教育・支援の充実に貢献することを目指す。

（２） 研修の特徴

①遠隔による実施

「オンデマンドの学習」と「オンライン同時双方向の対面学習（Web 会議システムの Zoom を利用）」を組み合わせた遠隔による複合型の学習形態で実施。

②6つのクールに分けて実施

約６か月の研修期間を、6クールに区分して実施した。各クールは、「オンデマンドの動画視聴による学び」「受講者各自の課題の遂行」「スクーリング（オンライン同時双方向対面学習）」で構成。

③クラスの編成

当研修では受講者を地域や現在携わっている現場などにより4つのクラスに編成。各クラスを3名ずつの講師が担当し、スクーリング等を実施していく。更に、今年度からは受講者のグループワーク等を支援するためのファシリテーターを新たに設置し、よりきめ細やかな指導を行った。

文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

2． 求められる資質・能力-シラバス-①

本研修のシラバス（科目と項目）と、文化庁文化審議会国語分科会（2019）『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告書）改訂版』の「児童生徒に対する日本語教師【初任】の資質・能力との対応関係を示す。
初任【児童生徒】に関しては該当する教育内容を含む（表のAは児童生徒に対する日本語教師【初任】の資質能力の対応項目、Bはその教育内容）。

	No.科目	項目	A	B
第1クール	1.外国人児童生徒等の背景・現状・課題1・2（6単位時間）	1 外国人児童生徒等の現状と課題 2 外国人児童生徒等の社会的・文化的背景 3 外国人児童生徒等施策	知識（3） 態度（1）（4）	①外国人児童生徒等の現状 ②外国人児童生徒等に対する教育施策 ④地域の現状
		4 地域の現状と課題（外国人集住地域・散在地域） 5 学習権・不就学 6 多文化共生	知識（3） 態度（4）	
	2.外国人児童生徒等の支援体制とネットワーク（3単位時間）	7 地方自治体の受け入れ体制 8 学校の教育体制 9 地域の支援体制	知識（3） 技能（7） 態度（3）	②外国人児童生徒等に対する教育施策 ③学習環境作り ⑤学校・地域・家庭の言語環境と言語使用 ⑫異領域との協働
第2クール	2.外国人児童生徒等の支援体制とネットワーク（3単位時間）	10 地域のリソースと社会的ネットワーク 11 保護者との連携・協力 12 エスニック・コミュニティ	知識（1） 技能（6） 態度（2）（4）	
	3.外国人児童生徒等の文化適応（6単位時間）	13 異文化適応 14 異文化間能力 15 自文化中心主義・文化相対主義	知識（1）（2） 態度（5）	⑥多文化家族と子供の文化適応 ⑧教育・発達心理学
		16 異文化間移動とアイデンティティ 17 生育環境 18 社会化	知識（1）（2） 態度（2）	

文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

2． 求められる資質・能力-シラバス-②

	No.科目	項目	A	B
第3クール	4.外国人児童生徒の言語習得と認知発達（6単位時間）	19 発達段階と言語習得 20 バイリンガリズム 21 母語・継承語・第二言語	知識（4） 技能（5）	⑤学校・地域・家庭の言語環境と言語使用 ⑦言語習得と認知発達 ⑧教育・発達心理学
		22 生活言語能力と学習言語能力（特別支援のニーズを含む） 23 リテラシーの発達 24 言語能力の測定（筆記テスト、DLA 等）	知識（4） 技能（5） 態度（2）	
	5.外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン（3単位時間）	25 コースデザイン 26「特別の教育課程」による日本語指導 27 評価の対象と方法	知識（5） 技能（1） 態度（5）	②外国人児童生徒等に対する教育施策 ⑨日本語指導のコースデザイン
第4クール	5.外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン（3単位時間）	28 初期指導（サバイバル日本語・日本語の基礎） 29 中期指導（技能別日本語） 30 日本語と内容（教科等）の統合学習（JSL カリキュラム等）	知識（5） 技能（1）（2） 態度（3）	
	6.外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際（6単位時間）	31 事例分析 32 子どもの日本語教育の方法1（幼児・小学校低中学年の子ども対象） 33 子どもの日本語教育の方法2（小学校高学年以上の子ども対象）	知識（4） 技能（1）（3） 態度（6）	⑧教育・発達心理学 ⑨日本語指導のコースデザイン ⑬児童生徒のための教材・教具のリソース
		34 教材・教具の活用 1（体験型教材・教具） 35 教材・教具の活用 2（教科書等の活用・著作権） 36 教材・教具の活用 3（ICT）	知識（4）（5） 技能（4） 態度（3）	

文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

2． 求められる資質・能力-シラバス-③

	No.科目	項目	A	B
第5クール	6.外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際（6/12 単位）	37 子どものための音声指導 38 子どものための文字指導 39 子どものための文法指導	知識（4） 技能（2）	
		40 子どものための語彙指導 41 子どものための文章・談話指導 42 言語生活	知識（4） 技能（2）	
	7.社会参加のための日本語学習支援1（3単位時間）	43 キャリア教育 44 ロールモデル 45 市民性教育	知識（2） 技能（8） 態度（1）	①外国人児童生徒等の現状 ④地域の現状 ⑫異領域との協働
第6クール	7.社会参加のための日本語学習支援2（3単位時間）	46 進路選択支援 1（進学） 47 進路選択支援 2（就労） 48 社会活動への参加支援	知識（3） 技能（8）	
	8.外国人児童生徒等のライフコースと日本語教師の成長（6単位時間）	49 ライフコース 50 エンパワーメント 51 人権・社会的正義・公正さ	知識（2） 技能（7） 態度（4）	③学習環境作り ⑫異領域との協働 ⑪内省
		52 実践の共有 53 対話と省察 54 専門家との連携・協力	技能（6）（7） 態度（5）	
実習（6単位時間）		（1）オリエンテーション（1単位時間） （2）授業見学（1単位時間） （3）指導案作成（1単位時間） （4）模擬授業・実習（2単位時間） （5）振り返り（1単位時間）	技能（1）（2）（5） 態度（1）	⑩参与観察・教育実習（模擬授業 を含む） ⑪内省

■ 各 研 修 の 概 要

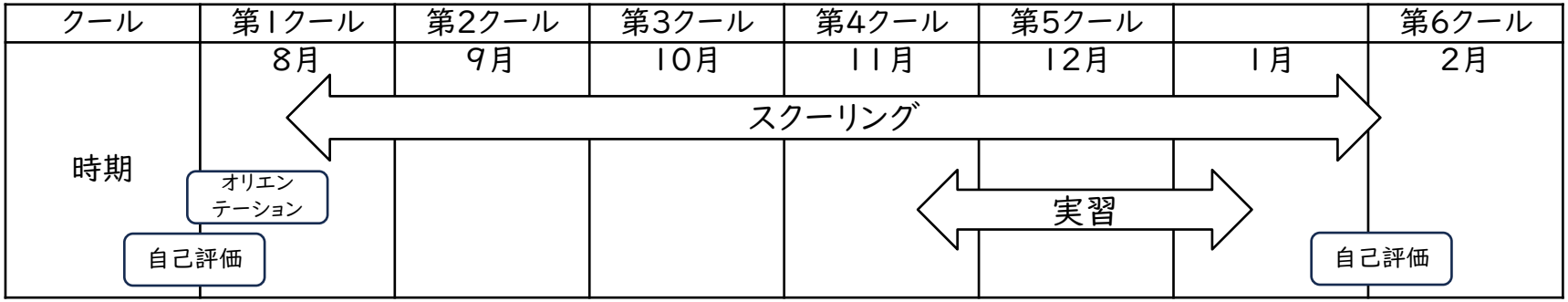
3．全体の研修スケジュールと実施体制

（１）スケジュール

研修期間：8月7日～2月1日

上記期間を６つのクールに分け、各クールの最終日にスクーリングを行った。
また、第4クール後と第5クールのあとに実習を実施した。

<全体像>



<スクーリング・実習の日程>

スクーリング等	日程	時間
スクーリング1	8月24日（日）	9:30～12:30
スクーリング2	9月21日（日）	9:30～12:30
スクーリング3	10月19日（日）	9:30～12:30
スクーリング4	11月24日（月・祝）	9:30～12:30
スクーリング5	12月14日（日）	9:30～12:30
スクーリング6	2月1日（日）	9:30～12:30

スクーリング等	日程	時間
オリエンテーション	8月7日（木）	19:00～20:00
実習1～3	11月24日（月・祝）	13:30～16:30
実習4～6	1月11日（日）	9:30～12:30

文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

3．全体の研修スケジュールと実施体制

（２）実施体制　研修担当講師

・クラスA～Dの各クラスに3名ずつ講師を配置。
・各クールのスクーリングの際にクラスごとに主講師・副講師（クールにより変動）を設置する形で実施。各クールの内容は主講師が集まり事前にすり合わせを行った。

＜研修スクーリング担当講師＞

講師：齋藤ひろみ（東京学芸大学教授）
講師：髙柳なな枝（地球っ子クラブ2000代表）
講師：牧原紀子（宇都宮大学非常勤講師）
講師：佐屋麻利子（神奈川県立相模向陽館高等学校教諭）
講師：米本和弘（東京学芸大学准教授）
講師：浦久仁子（堺市立三原台中学校教諭）
講師：市瀬智紀（宮城教育大学教授）
講師：河野あかね（つくばインターナショナルスクール日本語教育ディレクター）
講師：和泉元千春（奈良教育大学教授）
講師：松永典子（独立行政法人国際協力機構 九州・協力隊相談役）
講師：栗林恭子（松本市子ども日本語教育センター・コーディネーター兼日本語教育支援員）
講師：石動徳子（神戸市教育委員会事務局 学びの推進課 こども日本語サポートセンター指導主事）

文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

3． 全体の研修スケジュールと実施体制

（３）実施体制　ファシリテーター

■導入の背景
受講者数の増加に対応し、スクーリング・実習におけるグループワークを充実させるため今年度新たに導入

■配置体制
クラスA～Dに4名ずつ（計16名）配置
各回のスクーリングは主講師・補助講師・ファシリテーター2名の体制で運営

■主な役割
講師と連携し、グループワークの進行補助、議論の促進、活動支援、議論内容の整理やフィードバックを担当

■人材育成としての位置づけ
研修修了者・講師育成コース修了者を中心に構成されており、研修運営を支えるとともに、将来的な日本語教育人材の育成につながることを期待している

■ファシリテーターの構成・属性
・本研修および講師育成コース修了者を中心に構成
・学校、教育委員会、地域日本語教室など多様な現場での実践経験を有する人材が集まっている
・全国各地の実践者が参加し、地域ごとの教育環境や支援の実情を共有しながら、研修内容への理解と実務経験を活かして受講者の学びを支援

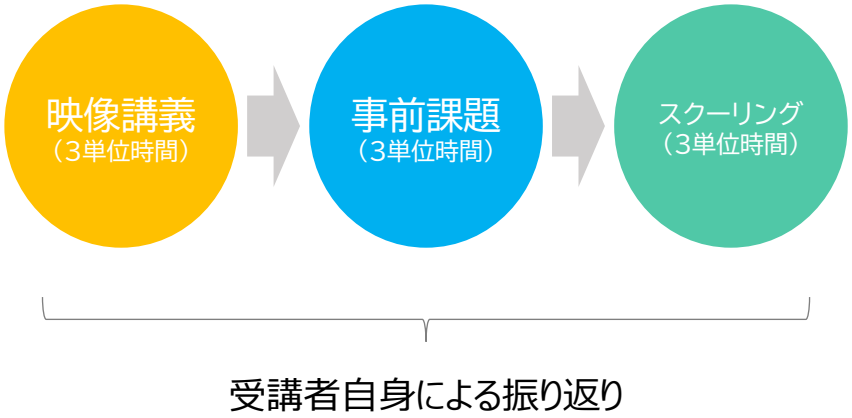
■ 各 研 修 の 概 要

3．全体の研修スケジュールと実施体制

（４）教育内容と方法

講義54単位時間を6クールに分けて実施した。
各クール（9単位時間）は【映像講義の視聴（3単位時間）】→【事前課題（3単位時間）】→【スクーリング（3単位時間）】で構成されている。また各クールのスクーリング後には学びを深めるために毎クールで受講者自身の振り返りを実施した。
これと並行して、第5クール、第6クール期間中に実習（6単位時間）を実施した。

＜各クールの構成＞



映像講義 各クール3本	事前課題	スクーリング
Himawari LMSにて指定された映像講義を視聴＋確認問題を実施し、ポートフォリオをGoogleフォームにて提出する。	各クールごとに課題を指示。映像講義を視聴の上取り組み、期限までにGoogleフォームにて提出。	それぞれが取り組んだ課題の内容を共有しながら、講義の内容について深める。グループワークや講師からの補足情報の提供など。

文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

3． 全体の研修スケジュールと実施体制

（５） 各スクーリングの内容と事前課題①

	科目名	主講師	事前課題
第1クール	1. 外国人児童生徒等の背景・現状・課題 2. 外国人児童生徒等の支援体制とネットワーク	浦久仁子 和泉元千春 牧原紀子 米本和弘	・国内の在留外国人と日本語指導が必要な児童生徒について、最新の結果をもとに、平成30年からの変化についてまとめる ・自身が関心のある地域の外国人児童生徒教育に関する施策・取り組みについて調べて整理した上で、子どもの学習権の保障や多文化共生を実現に向けて参考になる点と課題を挙げる。
第2クール	1. 外国人児童生徒等の支援体制とネットワーク 2. 外国人児童生徒等の文化適応	栗林恭子 髙柳なな枝 佐屋麻利子 河野あかね	・提示された2つの事例に関し、文化的背景を想像し、この後の学校の対応について提案する。 ・子どもたちが異文化適応において、出身地域・国の文化と日本社会・文化の「統合」に向かうために、社会関係資本を活用してどのような働きかけをしたいか具体的に検討する。
第3クール	1. 外国人児童生徒の言語習得と認知発達 2. 外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン	齋藤ひろみ 和泉元千春 市瀬智紀 松永典子	・東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターが製作した『「DLA」《使い方映像 マニュアルを視聴し、DLAの特徴をまとめる。 ・提示された例を参考に、想定される外国人生徒の「実態・ニーズ」をもとに、日本語教育の「目標」「内容・活動」を考える。

文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

3． 全体の研修スケジュールと実施体制

（５） 各スクーリングの内容と事前課題②

	科目名	主講師	事前課題
第4クール	1. 外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン(2) 2. 外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際(1) 3. 外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際(2)	浦久仁子 石動徳子 牧原紀子 米本和弘	・子ども向けの市販教材またはネットやアプリ教材、ダウンロード可能な教材の中から、他の人におすすめの教材または使ってみたい教材を調べ、紹介する。 ・動画教材および指定された資料を参考に、子どもの年齢に応じた指導方法の違いについて把握し、その上で提示された学習者、学習内容の導入・練習を行う指導案(教案)を作成する。
第5クール	1. 外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際(3) 2. 外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際(4) 3. 社会参加のための日本語学習支援(1)	齋藤ひろみ 石動徳子 市瀬智紀 河野あかね	・一定の会話力を身につけた子どもを対象に、その子が日常生活や学習で遭遇する問題や課題を解決するための会話力をたかめることを目的としたロールプレイ活動で使用するロールカードを作成する。 ・外国人児童生徒等が自分のキャリアを描き、社会との関わりを積極的に考えられるように、ロールモデルを紹介すると想定し、思い当たる人を理由を添えて挙げる。またロールモデルとの出会いの場・活動を、どのようにつくりるか具体的なアイデアを出す。
第6クール	1. 社会参加のための日本語学習支援(2) 2.子どものライフコースと日本語教師の成長(1) 3. 子どものライフコースと日本語教師の成長(2)	浦久仁子 和泉元千春 佐屋麻利子 松永典子	・自身の住む／活動する地域の、外国人児童生徒等の高校への「入口」から「出口」までに、どのような制度(高校入試を含む)や支援活動があるか調べてまとめる。 ・この研修で学んだことを活かし、今後自分が変えていきたいことやチャレンジしたいことについて、プレゼンテーション資料を作成する。 ・研修を振り返り、第2回自己評価表を記入する。

文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

3．研修の実施状況

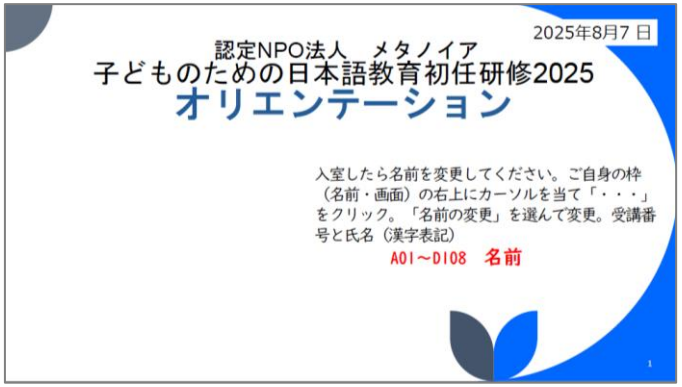
（６）オリエンテーション

＜実施概要＞

実施日時：2025年8月7日（木）19:00～20:00
実施形態：オンライン（Zoom）

＜実施内容＞

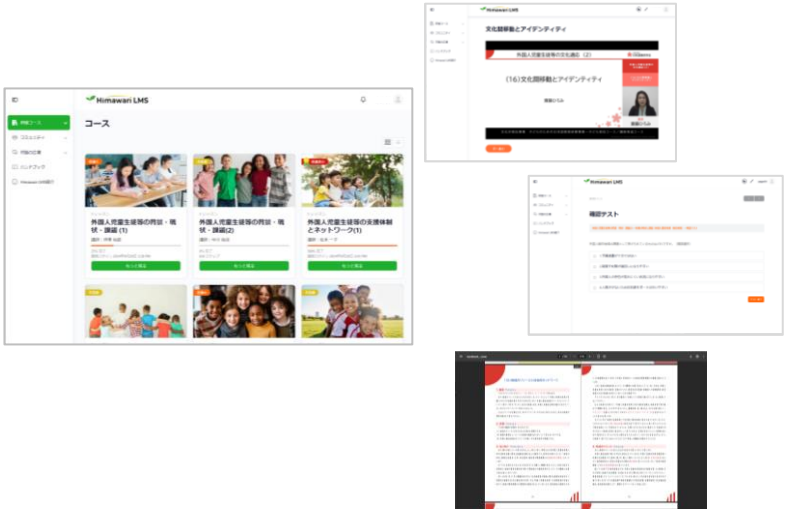
1．本研修の概要と参加の仕方について
2．クラスごとの顔合わせ



（７）映像講義

映像講義は2020年度～2023年度に公益社団法人日本語教育学会が文化庁委託「日本語教育人材の研修プログラム普及事業」にて作成したリソース「Himawari LMS」を利用した。このLMSに搭載された映像講義やハンドブックを通して学び、確認テストで理解度を測ることができる。
受講者は各クールで指定されたコースを学習し、ポートフォリオを事前課題と共に提出する。

■Himawari　LMS
https://lms.himawari-jle.com/lp/

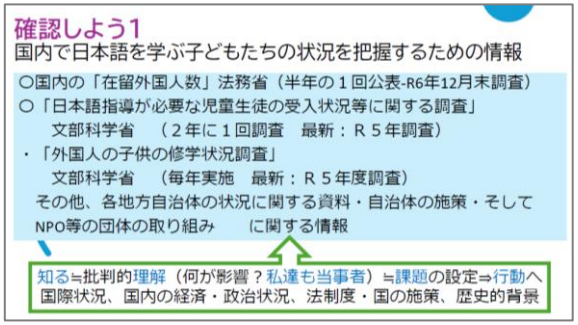


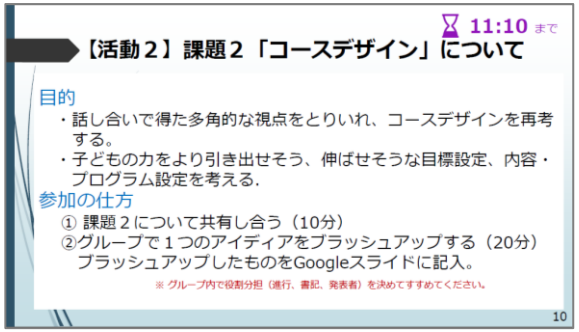
■ 各 研 修 の 概 要

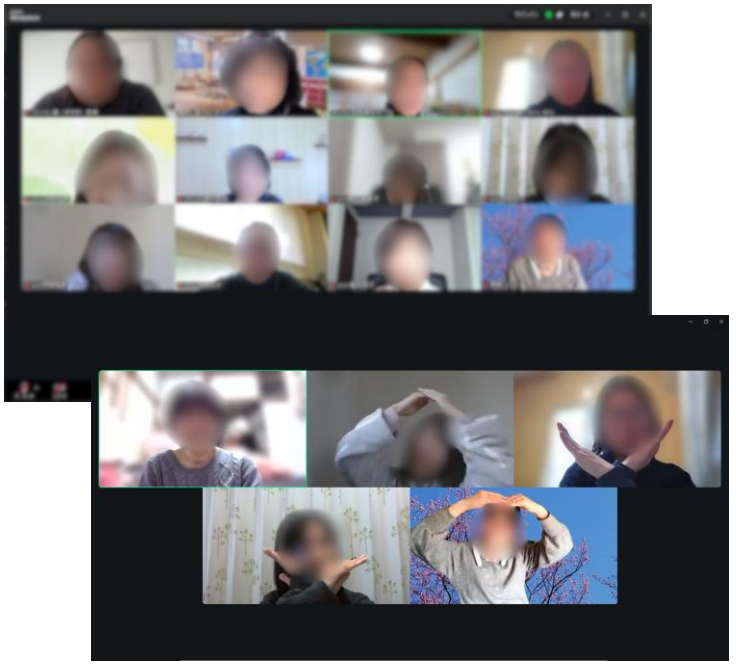
3．研修の実施状況

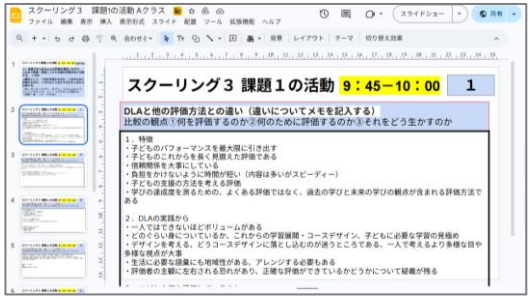
（８）スクーリング

スクーリングはクールにより全クラス合同または各クラス別にて行った。
映像講義や事前課題をふまえての内容となるため、講師からの補足や、事前に当日ワークを行うグループメンバーの事前課題に目を通し、事前学習の内容をより深めるような形態となっている。
スクーリング内でのグループワークでは、GoogleスライドやPadletなどのツールも活用した。









文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

3．研修の実施状況

（9）実習

実習はスクーリングで学んだことを踏まえて実践ができるよう、第4クール・第5クール後に実施された。
また実施前には現場理解として地域および学校現場の様子について実践者から話を聞き、地域と学校の違いや支援の特徴、それぞれが担う支援の意味について考え、子どもの様子・実情を知ることで、具体的な支援を考えられるようになるための時間を設けた。
なお、実習についてはスクーリング同様オンラインにて実施した。

＜実習の流れ＞

実習１　オリエンテーション → 現場理解 → 学習指導案作成

↓

実習１の振り返り＋指導案再考

実習２　模擬授業　説明1分＋模擬授業10分＋意見交換10分

実習２の振り返り＋指導案修正・再提出

【振り返りの際の3つの観点】
・対象の子どもに適した授業提案であったか。
・その授業で学習したことを子どもは生活・学習場面で活かすことができるか。
・自身の実践の中でどう活かせるか。

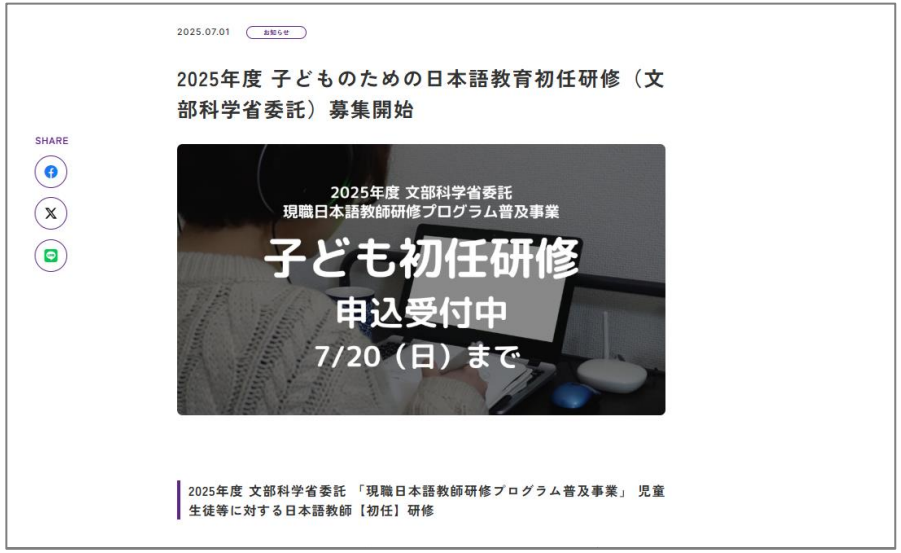
文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

４．受講者の募集①

＜募集方法＞

募集期間：2025年7月1日～7月20日
募集方法：当団体HPへの掲載、各種ウェブサイトへの告知掲載、SNS等での発信
応募方法：Googleフォーム
募集定員：100名
応募者数：261名



文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

４．受講者の募集②

＜応募資格＞

・いわゆる「日本語教育の有資格者」で、児童生徒に対する日本語教育の経験が0～3年（初任）の者。または、これに準ずる者。

・現在、または将来的に児童生徒の日本語教育に貢献する意欲がある者。

※受講については、これまで本研修（公益社団法人日本語教育学会実施の「子どものための日本語教育研修」2020～2023年度実施）の受講経験のない方に限らせていただきます。

＜応募条件＞

１）オンラインの同時双方向対面研修、実習に出席できること。基本的にはオリエンテーションを含め6回のスクーリング、実習の全てに参加いただきます。

２）オンライン上の研修を実施できる環境とスキルを有すること。Web会議システム（Zoom）による研修への参加やクラウド上での情報交換のための通信環境については、受講者ご自身で整えていただきます。

３）実施した課題の共有や交流の場では、互いの意見を尊重しつつ、積極的に参加すること。スクーリング・実習では、本名・カメラオンでご参加いただきます。

４）母語、国籍は問いませんが、日本語でのグループでの作業や話し合い等に支障がない程度の日本語の力を有することを条件とします。

５）多様な地域からご参加いただくため、応募者の居住地等を選考の要素として考慮します。

６）知的財産権、人格権（個人情報の守秘や肖像権の配慮等）について理解し、行動すること。例えば、本研修で提供する著作物の無断流用等は著作権侵害に当たり、認められません。

７）参加にあたり、研修実施の妨げとなるような行為や言動を慎むようお願いします。

■ 各 研 修 の 概 要

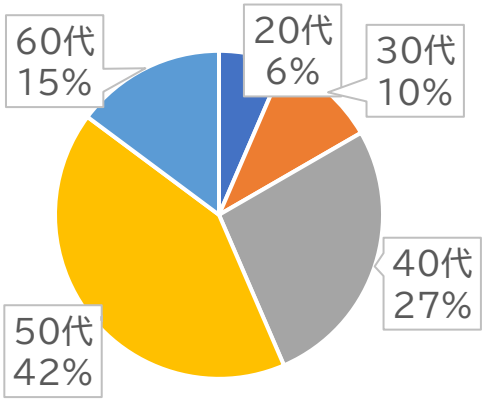
5．受講者概要

受講者数：108名（研修開始前）

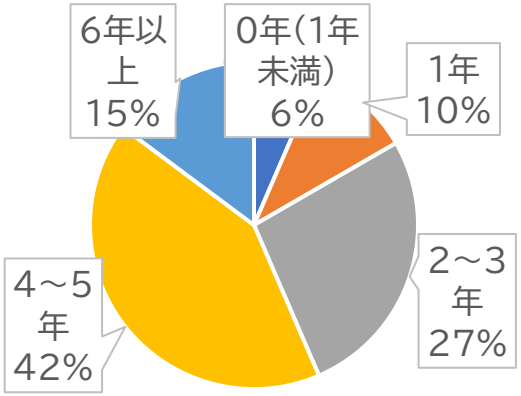
■受講者の居住地域

地域	人数
北海道・東北	5名
北関東・甲信	5名
南関東	46名
東海・北陸	14名
近畿	15名
中国・四国	11名
九州・沖縄	10名
海外	2名

■受講者の年代



■児童生徒への
日本語教育経験年数



受講者の居住地域は南関東が最も多く、近畿・東海北陸・中国四国・九州沖縄など全国各地から参加しており、地域的に幅広い分布が見られる。
年代は40代後半から50代の参加者が比較的多い。
受講動機としては、学校や地域で外国につながる子どもへの支援の必要性を感じたことや、現在関わっている児童への支援の質の向上を目指す実践的な目的が多く挙げられている。これらから、本研修は支援に関わる、または関わろうとする人材の基礎的専門性を育成する場として機能していると考えられる。

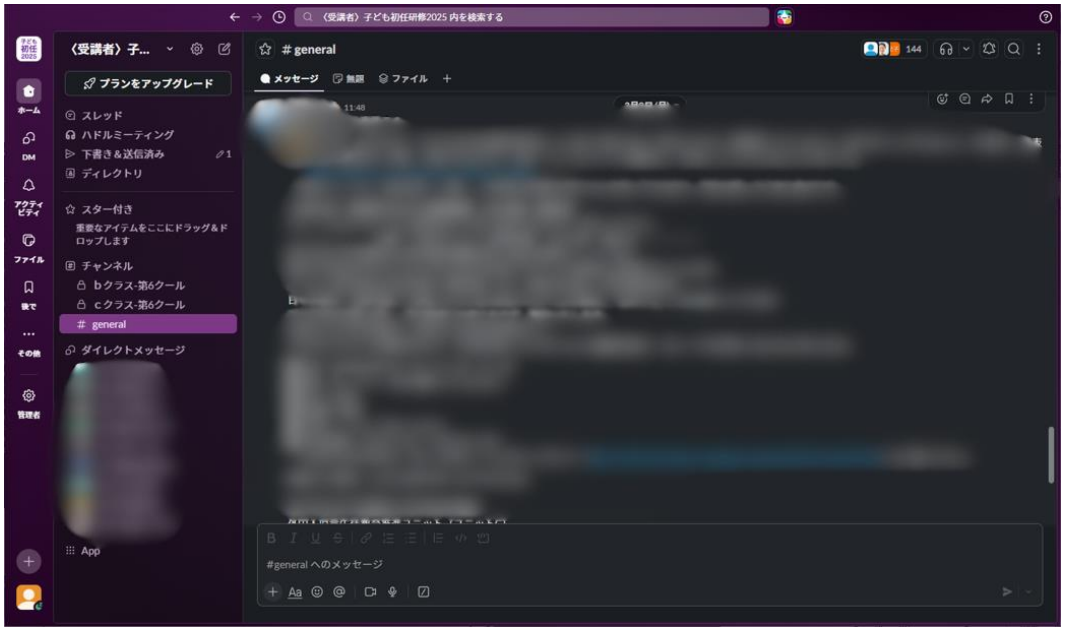
文部科学省

■ 各 研 修 の 概 要

6． 研修前後のフォローアップ

＜研修中・研修修了後のネットワーキング構築＞

研修中の受講者への連絡等にはSlackを使用した。全体や各クラスのチャンネルの他、児童生徒の日本語支援に関わる情報などを共有できるチャンネルを設け、研修中に講師や受講者から情報が発信された。
当Slackのワークスペースは研修修了後も開放し、受講者同士の交流や情報交換に活用っすることができる。



■ 各 研 修 の 概 要

7．評価

＜修了要件＞

- 研修に2/3以上参加していること。
- 提出課題、及びスクーリングの活動において、目標を概ね達成できていること。
- 実習（6単位）に参加して課題を提出していること。

＜修了証サンプル＞

修了番号：2401

修了証
CERTIFICATE

サンプル 殿
生年月日　1993年1月1日

あなたは、当団体の令和６年度文部科学省委託「現職日本語教師研修プログラム普及事業（分野：児童生徒等に対する日本語教師【初任】研修）『子どものための日本語教育研修～子ども初任コース』(2024年8月7日～2025年１月31日／60単位時間）において、全課程を修了されました。
よってここに受講修了証を授与いたします。

2025年３月１日

特定非営利活動法人メタノイア
代表理事　山田拓路

metanoia　文部科学省

＜修了者数＞

99/108名（91.6%）※受講を途中辞退した6名は対象外

＜評価について＞

■評価対象

①スクーリングへの参加状況および課題等の提出状況
②各クールにおける課題および振り返りの内容を通した到達目標の達成度
③実習への参加状況および提出物の内容を通した到達目標の達成度

■評価方法

上記の評価対象について、複数の評価観点を設定し点数化を行った。評価観点を基に複数のクラス担当者が評価を行った後、最終的にプログラム実施委員会において審議を行い、修了の可否を判断した。

文部科学省

■ その他の取り組み

１．研修修了者のためのフォローアップセミナー実施とネットワーク構築

（１）修了者ネットワークの構築

当事業では、昨年度に引き続き研修修了者を対象としたネットワークの構築を目指した取り組みを行った。
今年度の修了者を含め、**累計の登録者数は365名**となった。

Slackの活用

研修修了者同士の交流や情報共有を促進するため、修了者を対象としたSlackを運営している。現在の**Slack参加者は325名**であり、修了者ネットワークの基盤として活用されている。Slack内には南関東ブロック、近畿ブロックなど地域ブロックごとのチャンネルを設けており、各地域における活動情報の共有や実践に関する相談・情報交換など、修了者同士の継続的なコミュニケーションの場として機能している。

ブロックごとのZoomアカウントの付与

Slackはテキスト中心の交流となるため、修了者同士がより自由に意見交換や情報共有を行えるよう、各地域ブロックにZoomアカウントを付与した。これにより、各地域で自主的に交流会や情報交換会を開催できる環境を整えた。地域によって活動状況に差はあるものの、全ブロック合計で28回の交流会・定例会が実施され、延べ240名が参加した。これらの取組を通じて、研修修了後も地域を基盤とした継続的なネットワーク形成と実践交流が進められている。

文部科学省

■ その他の取り組み

１．研修修了者のためのフォローアップセミナー実施とネットワーク構築

（２）フォローアップ・セミナーの実施

研修修了者のフォローアップおよび修了者同士の交流・ネットワーク形成を目的として、全国の修了者を対象にオンラインによるフォローアップ・セミナーを全2回実施し、修了後も継続的に学ぶ機会の提供と、修了者同士が実践や課題を共有する機会の創出を図った。
また、昨年度は地域を基盤としたネットワークの構築に重点を置いていたが、今年度は修了者の興味・関心に基づくテーマ別のネットワーク形成を目指し、修了者からの関心が高い「ことばの力のものさし」および「改訂版DLA」をテーマとして設定した。セミナー後の参加者アンケートからも、当該テーマを基にしたネットワークへの関心が高いことが確認され、今後のネットワーク構築に向けて主体的に取り組みたいと手を挙げる修了者も見られた。これにより、修了者同士の継続的な学び合いとネットワーク形成につながる機会となった。

文部科学省

■ その他の取り組み

1． 研修修了者のためのフォローアップ・セミナー実施とネットワーク構築

＜全国フォローアップ・セミナー実施状況①＞

	第1回
テーマ	『多文化多言語の子どものことばの力の評価「ことばの力のものさし」と「改訂版DLA」』
講師	櫻井千穂氏 （大阪大学大学院人文学研究科 日本学専攻 応用日本学講座）
日時	2025年8月31日(日) 9:30～12:30
実施方法	オンライン（Zoom）
申込者数	142名
参加者数	119名

＜参加者の声＞

・ことばの力のものさしをを活用することで、「日本語ができない子」に日本語の力をつけるのが支援者の役目という呪縛から解放され、子どもの今をポジティブに捉えられると感じた。

・改訂版DLAの考え方や評価方法などを具体的に説明いただき，今後のDLA実施の大きな参考になりました。

・恥ずかしながら「言葉の力のものさし」の存在をこのセミナーの案内で知りました。実例が多く、初心者にも大変わかりやすい講義でした。ありがとうございました。

文部科学省

■ その他の取り組み

1． 研修修了者のためのフォローアップ・セミナー実施とネットワーク構築

＜全国フォローアップ・セミナー実施状況②＞

	第1回
テーマ	『多文化多言語の子どものことばの力の評価「ことばの力のものさし」と「改訂版DLA」』
講師	小島祥美氏 （東京外国語大学多言語多文化共生センター（センター長） 准教授）
日時	2026年2月15日(日) 9:30～12:30
実施方法	オンライン（Zoom）
申込者数	148名
参加者数	114名

＜参加者の声＞

・「ことばの力のものさし」やDLAの使い方について、改めて確認することができました。また、皆さん、わずか10分間でさまざまな授業の組み立てのアイディアを出されていて、発想の広がりに驚かされるとともに、とても参考になりました。

・グループで見立てをするというプロセスがあってよかったです。発達段階に応じたステージとステップの構成が理解できました。また、実践を考えるワークでは様々なアイディアを聞けて考えを深めることができたと思います。とてもいい刺激になりました。

文部科学省

■ その他の取り組み

１．研修修了者のためのフォローアップセミナー実施とネットワーク構築

（３）地域ブロック主催セミナー

今年度の新たな試みとして、昨年度構築された地域ブロックにおいて継続的なコミュニケーションを図るとともに、各地域で年1回、外部講師を招いた研修および交流を伴う対面セミナーを実施することとした。これにより、新たな知見のインプットを促すとともに、メンバー同士の交流への意欲向上を図っている。
今年度は、近畿ブロックおよび九州・沖縄ブロックにおいてそれぞれセミナーが実施された。
なお、本セミナーは修了者による主体的な活動の促進を目的とし、企画、講師への依頼、参加者への案内、当日の運営までを修了者が中心となって実施した。

■ その他の取り組み

1．研修修了者のためのフォローアップセミナー実施とネットワーク構築

（３）地域ブロック主催セミナー【近畿ブロック】

	近畿ブロックセミナー
テーマ	外国人児童生徒への支援のあり方と教科指導の実践について
講師	高見成幸氏（丹波篠山市立西紀北小学校　校園長）
日時	2025年12月10日（日）14:00～16:30
実施方法	対面
申込者数	33名
参加者数	29名

＜参加者の声＞

・具体的な支援の方策から、授業づくりに心がけることまで、具体的な話をたくさん共有いただけました。
・具体的な実践例をご紹介いただき、大変参考になりました。子どもの実態に合わせた支援内容を考えていくヒントをたくさんいただきました。
・教科志向の授業をしたことがないのですが、子どもの退室時などに小学校で日本語指導をされている先生にも共有などできそうです。初期指導教室でも取り入れていきたいです。

文部科学省

■ その他の取り組み

1．研修修了者のためのフォローアップセミナー実施とネットワーク構築

（３）地域ブロック主催セミナー【九州・沖縄ブロック】

	九州・沖縄ブロックセミナー
テーマ	子どもの日本語教育に関わっている人たちに伝えたいこと
講師	星野ルネ氏
日時	2026年2月14日（土）14:00～15:30
実施方法	対面／オンライン（Zoom）
申込者数	対面28名／オンライン27名
参加者数	対面28名／オンライン18名

＜参加者の声＞

・沢山の格言が出てきて、心に刺さることばかりでした。特に「先に与えるのは知識ではなく関心」「世界を俯瞰して見る翼を子どもに授けてあげてほしい」などの言葉が心に残りました。

・私たち支援者が教えていることは１％だけど、今後の99％になるということ。私の知り合いの元外国人生徒の方も、学校での日本語指導はその後の人生の土台になるとおっしゃっていました。同じだなーと思いながら、心に刻みました。

文部科学省

■ 受講者数及び修了者数の向上に対する取組

1． 前年度との比較

＜受講者数の変化＞

	今年度	前年度
応募者数	261名	230名
受講者数	108名	75名
修了者数（修了率）	99名（91.6%）	70名（97.2%）

2． 受講者数及び修了者数の向上に対する取り組み

本研修では、受講者数100名以上の確保を目標として募集・広報を行った。前年度は応募者数230名、受講者数75名であったのに対し、今年度は応募者数261名、受講者数108名となり、受講者数は前年度比33名増となった。結果として、受講者数は目標としていた100名を上回ることができた。
受講者数の増加に向けては、関係機関や告知サイトへの周知に加え、SNSやメールニュースレター等、当法人のネットワークを活用した広報を行い、学校関係者や地域日本語教育関係者など幅広い層に情報提供を行った。また、オンライン形式で実施することで地域を問わず参加できる環境を整え、全国各地からの応募につながった。
さらに、受講者数の増加に対応し研修の質を維持するため、クラス制を導入するとともに、グループワーク等を支えるファシリテーターを配置した。これにより受講者が継続して学習に取り組みやすい環境を整え、結果として修了率91.6%という高い水準の維持につながった。

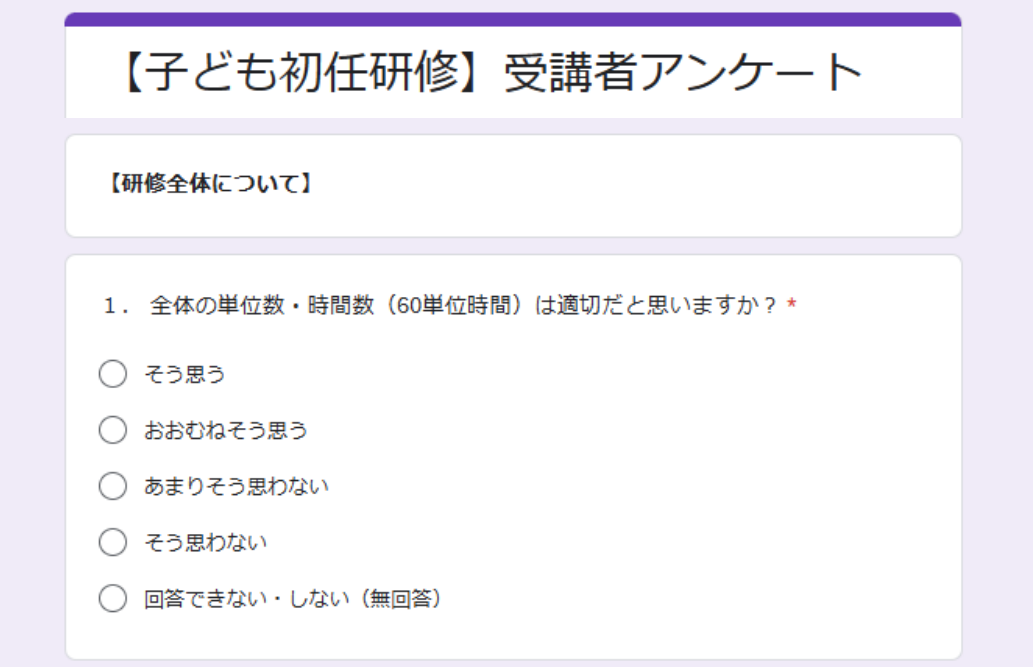
文部科学省

■ 受 講 生 か ら の 評 価

1． 受講者アンケートの実施と回答について

研修後、受講者に対して研修に関するアンケートを実施した。質問内容については、大きく分けて【研修全体について】【研修への取り組み・満足度について】【LMSについて】【目標の達成・今後の活動について】【修了後のネットワーキングについて】の5つの観点に分け、それぞれ複数の質問項目を設定した。
またそれらとは別途、自由記述にて回答を受け付けた。

＜受講者アンケート概要＞
実施期間：2月1日～2月8日
回答数：88件
回答方法：Googleフォーム


【子ども初任研修】受講者アンケート

【研修全体について】

1． 全体の単位数・時間数（60単位時間）は適切だと思いますか？ *

- そう思う
- おおむねそう思う
- あまりそう思わない
- そう思わない
- 回答できない・しない（無回答）

文部科学省

■ 受 講 生 か ら の 評 価

1． 受講者アンケートの実施と回答について

＜アンケート結果（質問と回答①）＞

質問項目	そう思う	おおむね そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない	無回答
全体の単位数・時間数は適切だと思いますか？	48名	34名	3名	1名	2名
講義動画視聴＋課題＋スクーリング＋実習のバランスは適切だと思いますか？	41名	40名	4名	2名	1名
実習の内容や実施方法について適切だと思いますか？	36名	44名	7名	1名	0名
課題の量や内容は適切だったと思いますか？	36名	46名	6名	0名	0名
スクーリングの内容は適切だったと思いますか？	36名	44名	7名	1名	0名
研修はオンラインで実施しましたが、参加しやすかったですか？	61名	22名	3名	1名	0名
課題について十分に取り組んだと思いますか？	37名	47名	3名	0名	1名
スクーリングに積極的に参加しましたか？	63名	24名	1名	0名	0名
スクーリングの内容について十分に理解できたと思いますか？	24名	60名	3名	0名	1名

文部科学省

■ 受 講 生 か ら の 評 価

1． 受講者アンケートの実施と回答について

＜アンケート結果（質問と回答②）＞

質問項目	そう思う	おおむね そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない	無回答
スクーリングの内容について十分に満足しましたか？	56名	30名	2名	0名	0名
研修を通して他の受講者と十分に交流できたと思いますか？	19名	46名	21名	2名	0名
動画の内容（項目）について十分に理解できたと思いますか？	28名	52名	7名	0名	0名
動画の内容（項目）について十分に満足しましたか？	48名	35名	4名	0名	1名
LMS（Himawari）の使い勝手は良かったですか？	44名	37名	6名	1名	0名
研修修了後もLMS（Himawari）を活用したいと思いますか？	38名	41名	6名	1名	2名
この研修を受けるにあたってのご自身の目標は達成できたと思いますか？	23名	62名	2名	0名	1名
この研修で学んだことは今後の児童生徒教育の活動に活かせると思いますか？	69名	18名	1名	0名	0名
他の受講者と今後もつながりを持てそうだと感じましたか？	31名	42名	11名	2名	2名

文部科学省

■ 受 講 生 か ら の 評 価

1． 受講者アンケートの実施と回答について

＜アンケート結果（まとめ①）＞　※青い背景部分は受講者のコメントを抜粋したもの

1． 研修全体について

研修全体の設計（単位数、構成、実習、課題、スクーリング）としては、高い評価を得ている。各項目において「そう思う」「おおむねそう思う」が大多数を占めており、研修設計の妥当性が確認できる。特にスクーリングの評価が最も高く、研修の中心的な学習機会として機能していたと考えられる。
一方で、実習や課題について「やや多い／負担がある」といった声も見られた。

・取り組んだ課題の内容を、スクーリングで確認しより深く理解することができたと思います。
・最初は多くて大変だと思ったが、課題の遂行を重ねるごとに新しい発見や知識が増えていったので、結果、自分にとってはどの課題の内容も有意義だった。量としては多いが内容を深く掘り下げていくことは重要なので、妥当だと思う。

2． 研修への取り組み・満足度について

回答から、受講者の研修への参加状況・満足度は全体的に非常に高い水準であり、受講者が主体的に研修へ取り組んでいたことがうかがえる。また研修全体の中でスクーリングの評価が特に高かったことから、スクーリングが学習理解・満足度の向上に寄与したことが確認できる。
ただし、「受講者同士の交流」については意見がやや分かれており、交流の機会がやや不足したと感じた受講者が一定数いると考えられる。

・最初は受け身の参加だったが、主体的に参加することで、学びが深まることを理解した。
・交流はできたと思うが、差し支えのない範囲でせっかく同じグループになった人たちが普段どのような取り組みをしているのかについても知れたら良かったなと思った。

文部科学省

■ 受 講 生 か ら の 評 価

1． 受講者アンケートの実施と回答について

＜アンケート結果（まとめ②）＞　※青い背景部分は受講者のコメントを抜粋したもの

3． LMSについて

LMSの活用についても、概ね高い評価となった。回答結果から、LMSが教材提供の手段として機能していること、修了後の自己学習にも活用可能な環境として認識されていることが確認できた。
一方で、コメントなどから「内容が難しい部分がある」「知識としては理解できたが実践にはまだ時間が必要」といった意見も一部見られた。

・現在、子どもに対する日本語教育に関わっていない状況での受講でしたが、事前に動画学習があったことで、スクーリングについていけたと思います。
・簡単に頭の中に内容が入ってくる領域と、用語の内容を確認しながら視聴しないといけないところがあり、内容はひと通りなぞったが細かい部分がまだ身についていないと実感しています。

4． 目標の達成・今後の活動について

研修を通して、受講者自身の目標達成および今後の教育活動への活用可能性は非常に高い評価となっている。
特に「今後の活動への活用可能性」はほぼ全員が肯定的に回答しており、研修内容が実践につながる知識として受け止められていることが確認できる。
またコメントからは、「基礎的な知識」「実践に向けて視点」「専門知識の体系的な理解」などが得られたことが読み取れた。

・現在の仕事で活かせることがたくさんありました。また、新しい視点や今後必要になる知識など、多岐にわたる学びを得られたと思います。
・知識が体系的に整理され、また、同じ仕事をする方から話を聞いて吸収することができました。

文部科学省

■ 成 果 と 課 題

2． 成果と課題について①

＜研修の成果＞

①受講者同士の学び合いの促進

スクーリングやグループワークを通じて、受講者同士が自身の実践や課題を共有し、互いの経験から学び合う機会が生まれていた。特に少人数での対話の場では、参加者が安心して意見を述べることができ、理解を深めることにつながっていた。こうした対話型の学習が、研修全体の学びの質を高める要因となっていた。

②理論と実践の接続

講義で扱われた理論や知識が、模擬授業や実習、課題への取り組みを通して具体的な実践と結びつけられていた。受講者は自身の現場経験を踏まえながら学びを整理し、教育実践にどのように活かすかを考える機会を得ていた。理論と実践を往還する学習プロセスが、理解の深化に寄与していた。

③受講者の成長

研修の初期と後期を比較すると、受講者の発言内容や課題の質に変化が見られ、理解の深まりや実践への意識の高まりが確認された。特に最終発表や課題では、研修で学んだ視点を踏まえて自らの実践を整理する様子が見られた。こうした変化から、研修を通じた受講者の成長が明確に示されていた。

④地域を超えたネットワーク形成

本研修には全国各地から受講者が参加しており、地域や所属の異なる教育実践について意見交換が行われていた。これにより、各地域の課題や取り組みを共有する機会が生まれ、視野を広げることにつながっていた。研修を通して新たな人的ネットワークが形成されたことも大きな成果である。

文部科学省

■ 成 果 と 課 題

2． 成果と課題について②

＜研修の課題＞

①スクーリング時の時間配分

スクーリングでは講義、グループワーク、発表など複数の活動を行うため、十分な議論や振り返りの時間を確保することが難しい場面があった。特にグループワーク後の共有や全体での意見交換の時間が不足する場合があり、学びを深める機会をさらに充実させる余地がある。

②運営側の情報共有の方法

研修運営では主にSlackを用いて情報共有が行われていたが、発信数が増えることで必要な情報を探しにくくなるという意見が見られた。また、過去のやり取りを確認する際に情報が整理されていないと感じる場面もあり、情報整理や共有方法の見直しが課題として挙げられる。

③研修の準備作業について

研修の準備や運営に関する作業について、今回新たにファシリテーターという役割を設置したこともあり、役割分担や手順が必ずしも明確でない部分があるとの指摘が見られた。特に資料準備や事前確認などの作業について、より整理された運営体制が求められている。業務内容の整理や共有を進めることで、運営の効率化につながると考えられる。

文部科学省

■ 成 果 と 課 題

3． 事業評価委員会による評価①

1． 委員による評価

今年度事業評価委員会では「①児童生徒等への日本語教師研修」に関して「事業の目的が達成できるように適切に企画計画されていたか（クラスの適切さ・教材利用の適切さ・研修の進め方・人員の配置について）」、「ファシリテーターを配置することが人材の育成につながっていたか」の2つの観点から、「②ネットワークの仕組み構築」に関しては「「日本語教育人材の養成・研修のあり方について（報告）改訂版」に示されている「児童生徒等に対する日本語教師【初任】に求められる資質・能力」を育むセミナー、ネットワークが企画され、実施されたか」の観点から5名の委員が評価を行った。評価項目、評点の平均（５が最高（非常によい等）、１が最低（非常に問題がある等））、委員からの評言は以下の通りである。

①児童生徒等への日本語教師研修

○事業の目的が達成できるように適切に企画・計画されていたか（5点）

全体的で非常に良いという4.8点の評価となった。
各種委員会による組織的な運営のもと、講師の役割分担や出欠管理を含めた体制が整備され、子どもの視点に立つ学びや多様なテーマを安心して議論できる場づくりがなされていた。また、受講者が次のステップとして前向きに捉える有意義な研修が実現している。
グループによって進み方が異なる場合もあり時に他のグループの活動終了を待つ時間が生じていることから、よりゆとりあるタイムテーブル設定や討議時間の確保など、時間管理の工夫が求められる。

文部科学省

■ 成 果 と 課 題

3． 事業評価委員会による評価②

①児童生徒等への日本語教師研修

○ファシリテーターを配置することが人材の育成につながっていたか（5点）

課題の指摘はあるが全体的で非常に良いという4.6点の評価となった。
アプリのトラブル対応から議論の円滑化までファシリテーターが的確に支援し、講師との綿密な事前打合せを経たファシリテーターとしての参加、またはオブザーバー参加を行い、アプリのトラブル対応から議論の円滑化までファシリテーターとして的確に活動の活性化に貢献していた。この活動を通し、学習デザインへの理解を深めつつ受講者に主体的に向き合う環境が整えられ、研修効果の向上と人材育成の面で成果が確認できた。
ファシリテーターの名称と実際の役割との齟齬や講師によるファシリテーター支援の負担感が見られたことから、役割の明確化と事前研修・打合せ内容の一層の整理が必要である。

②ネットワークの仕組み構築

○「児童生徒等に対する日本語教師【初任】に求められる資質・能力」を育むセミナー、ネットワークが企画され、実施されたか（5点）

全体的で非常に良いという4.8点の評価となった。
講師と参加者、参加者同士の対話が活発に行われ、多様なツールを活用しつつ地域開催セミナーや自主研修会、「改訂版DLA・ことばの力のものさし」等の多岐にわたる研修を通じて、地域内外に広がる修了者ネットワークが形成されつつある。修了者がゆるやかにつながりながら相互に学び合う基盤が着実に構築されている。
地域別ネットワークは進展している一方で、テーマ別ネットワークの構築は本格化しておらず、今後は全国的視点での継続的な連携促進が求められる。ただし、今後どのようなネットワークが修了者の資質、能力の向上に寄与するのかを再検討し、今後のあり方は検討すべきである。

文部科学省

■ 成 果 と 課 題

3． 事業評価委員会による評価②

2． 評価のまとめ

本事業の児童生徒等への初任者研修は、各種委員会による組織的運営のもと、講師の役割分担や出欠管理体制を整備し、子どもの視点に立った学びと多様なテーマを安心して議論できる場を実現した点が評価できる。ファシリテーターも事前打合せを踏まえ、トラブル対応や議論の活性化に的確に寄与し、人材育成と研修効果の向上につながった。一方で、進行差による待ち時間や役割認識の齟齬への対応が課題である。ネットワーク面では地域内外の連携が進む一方、テーマ別の在り方については今後の検討が求められる。